処方番号：104A　　**処方名**：小青竜湯加石膏（しょうせいりゅうとうかせっこう）

処方構成：
麻黄 2-3、芍薬 2-3、乾姜 2-3、甘草 2-3、桂枝 2-3、細辛 2-3、五味子 1.5-3、半夏 3-6、石膏 5

用法・用量：
湯

しばり：
体力中等度で、うすい水様のたんを伴うせきや鼻水が出て、のどの渇きがあるものの次の諸症

効能・効果：
気管支炎、気管支ぜんそく、鼻炎、アレルギー性鼻炎、むくみ、感冒

原典：金匱要略
出典：

解説：
小青竜湯に石膏を加えたものであり、より症状が強く苦しいものに用いる。

104A.小青竜湯加石膏

参考文献名		麻黄	芍薬	細辛	乾姜	甘草	桂枝	五味子	半夏	石膏
診療医典	注1	3	3	3	3	3	3	3	6	5
処方集	注2	3	3	3	3	3	3	3	8	2
診療の実際	注3	3	3	3	3	3	3	3	6	5
応用の実際	注4	–	–	–	–	–	–	–	–	–
明解処方	注5	3	3	3	3	3	3	3	6	5
図説東洋医学		3	3	2	2	2	3	2	6	2

注1 小青竜湯の証で，煩躁のあるものに用いる。

注2 小青竜湯の証で内熱あり，あるいは煩躁，あるいは咳逆上気するもの。

注3 小青竜湯の証で病状が激しく，煩躁を現わすもの。

注4 小青竜湯の証で，浮腫と咳嗽の強いものに用いる。

注5 小青竜湯の証で，上逆[illegible]煩躁口渇のあるときに用いる。

処方番号：104B　　**処方名**：小青竜湯加杏仁石膏（小青竜湯合麻杏甘石湯）

（しょうせいりゅうとうかきょうにんせっこう／しょうせいりゅうとうごうまきょうかんせきとう）

処方構成：

麻黄 4、芍薬 2-3、乾姜 2-3、甘草 2-3、桂枝 2-3、細辛 2-3、五味子 1.5-3、半夏 3-6、杏仁 4、石膏 10

用法・用量：

湯

しばり：

体力中等度で、せきが出て、のどの渇きがあるものの次の諸症

効能・効果：

気管支ぜんそく、小児ぜんそく、せき

原典：内科秘録

出典：

解説：

本方は小青竜湯と麻杏甘石湯の合方である。咳き込み、喘鳴、息切れなどが小青竜湯の証より激しく、口渇もあるときに用いる。

104B.小青竜湯合麻杏甘石湯

参考文献名		麻黄	芍薬	乾姜	甘草	桂枝	細辛	五味子	半夏	杏仁	石膏
診療医典	注1	4	3	3	3	3	3	3	6	4	10
処方分量集		3	3	3	3	3	3	3	6	4	10
処方解説	注2	3	3	1.5*1	3	3	3	1.5	6	–	–
明解処方	注3	3	3	3	3	3	3	3	6		5
内規	注4	2～3	2～3	2～3	2～3	2～3	2～3	1.5～3	3～6		
		4			2					4	10

*1 乾生姜

注1 麻疹：発疹後，気管支炎もしくは気管支肺炎を併発し，咳嗽，呼吸困難を訴えるものに用いる。

注2 小青竜湯加減法：小青竜湯加石膏は，小青竜湯の証が激しく，燥煩を現わす場合に用いる。また麻杏甘石湯と合方の意味で杏仁，石膏を加えることがある。

注3 小青竜湯類方：小青竜湯加石膏(金匱)一本方に石膏5を加える。上逆劇しく煩燥，口渇あるときに用いる。また麻黄，石膏の組合わせになるため，原方のように無汗でなく，油汗の出る症(麻杏甘石湯のように)にもなる。本間棗軒は小青竜湯と麻杏甘石湯合方の意味で，この方をよく使っている。

注4 小青竜湯(上段)ならびに麻杏甘石湯(下段)が収載されている。

処方番号：105　　**処方名**：小半夏加茯苓湯（しょうはんげかぶくりょうとう）

処方構成：
半夏 5-8、ヒネショウガ 5-8（生姜を用いる場合 1.5-2）、茯苓 3-5

用法・用量：
湯

しばり：
体力に関わらず、悪心があり、ときに嘔吐するものの次の諸症

効能・効果：
つわり、嘔吐、悪心、胃炎

原典：金匱要略
出典：

解説：
漢薬の中、鎮吐作用のあるものの代表は半夏と生姜である。『本草書』にもこの二者は「胃を開き、気を下し、嘔吐を止む」ものと記載され、胃に直接的に作用して幽門部の痙攣を鎮め、気を下すから、中枢性作用もあると考えられていた。今日、半夏の鎮吐作用に中枢性、末梢性の二者は具っていることは、実験的に知られている。

本方は嘔吐を目標に用いるが、五苓散の適応症である水逆性の嘔吐と区別して用いる。すなわち、五苓散で奏効する嘔吐は、ひどく口渇を訴え、水を飲むとたちまちその水を吐く、吐くとまた渇く、飲むとまた吐く、尿がよく出ないときに用いるが、本方は激しい口渇はなく悪心のあるものに用いる。生姜は、日局生姜を用いるときは 1.5-2 とするが、ヒネショウガを用いることが望ましい。

105.小半夏加茯苓湯

参考文献名		半夏	生姜	乾生姜	茯苓	用法・用量
診療医典	注1	5	5	−	5	*4
治療の実際	注2	8	8	−	8	*5
処方解説	注3	8	5	*1	5	
応用の実際	注4	6	6	*2	5	
基礎と診療	注5	8	8	−	3	
処方分量集		6	6	−	5	
漢方処方集		8	8	*3	3	*6
漢方処方	注6	6	2	−	5	

*1 乾生姜を用うときは1.5
*2 乾生姜は効果はあまりない
*3 必ずひね生姜
*4 冷服
*5 1回に多量飲むと吐くことがあるから少量ずつ数回に分けて飲んだほうがよい
*6 常煎法

注1 みぞおちがつかえ，心下に停水があり，ときにめまいや動悸があり，また口渇のある嘔吐，つわりの初期の嘔吐，諸種の嘔吐，急性胃腸炎などに用いる。

注2 悪心・嘔吐を主訴とするつわりの嘔吐や，薬物による胃障害からくる嘔吐に用いる。

注3 急性胃腸炎，水腫性脚気にともなう嘔吐，小児の嘔吐，湿性胸膜炎や蓄膿症などに応用される。

注4 胃下垂症，胃アトニー症，その他諸種疾患で胃内停水があって嘔吐がはげしいとき。

注5 小児の吐乳，急性胃カタルなどで吐気があり，口が渇き尿の出が少なく目まいや動悸のある人によい。

注6 車酔。

処方番号：106　　**処方名**：升麻葛根湯（しょうまかっこんとう）

処方構成：
葛根 5-6、升麻 1-3、生姜 0.5-1（ヒネショウガを使用する場合 2-3）、芍薬 3、甘草 1.5-3

用法・用量：
湯

しばり：
体力中等度で、頭痛、発熱、悪寒などがあるものの次の諸症

効能・効果：
感冒の初期、皮膚炎

原典：太平恵民和剤局方
出典：万病回春

解説：
麻疹で発疹の出る前にも用いることができる。通常生姜を用いる。

106.升麻葛根湯

参考文献名		葛根	升麻	生姜	芍薬	甘草	葱白
診療医典	注1	5	2	2	3	1.5	
処方解説	注2	5	1	乾生姜 1	3	1.5	
応用の実際	注3	5	2	2	3	1.5	
要方解説	注4	5	2	2	3	1.5	1寸のもの2個
診療の実際		5	2	2	3	1.5	
処方集	注5	6	3	3	3	3	
処方分量集		5	1	乾生姜 1	3	1.5	

注1 麻疹の初期に用いて，発疹を促進し，経過を順調にする効がある。発疹が出そろうまでのましてよい。

注2 「時気瘟疫，頭痛発熱，肢体煩疼，瘡疹未発のとき」麻疹，痘瘡，猩紅熱などのように発疹をともなう熱性病の初期，または流感の頭痛はなはだしく脳症状のあるものに用いる。目痛み，鼻乾き，衄血し，不眠などがある。流行性感冒，麻疹，猩紅熱，水痘，衄血 眼充血，皮膚病，扁桃腺炎などに応用される。

注3 麻疹の初期，未だ発疹が出ないうち，熱が出て感冒などの熱などの熱とみわけがつかない時期に用いる。麻疹で上記のような時期や，なかなか発疹せず，内攻の恐れがあるときに用いて，速やかに発疹させる。また水痘などにも応用できる。

注4 「大人，小児，時気瘟疫，頭痛発熱，肢体煩疼するを治す。及び瘡疹すでに発し，及び未だ発生せず，疑似の間宜しく之を服すべし。○陽明の傷寒中風，頭疼，身痛，発熱，悪寒，汗なくして口渇し，目痛み，鼻乾いて臥することを得ず，及び陽明の発斑出でんと欲して出でず，寒喧時ならざるを治す。○足の陽明の脈，目に抵り，鼻を挾む。故に目痛み，鼻乾く，又眠ること能わず。

この方は胃中の熱および血中の熱を清解する剤である。陽明経の表邪を発表する。諸熱性病，目痛み，鼻乾き，不眠し，汗無くして悪寒発熱するのは陽明経の熱症である。本症は痘瘡，麻疹，猩紅熱等発疹を伴なう熱性病の初期，又は流行性感冒にて脳症状の著明なものに用いられる。発疹の未だ現われざるもの，将に現われんとする時期に適応する。

痘瘡，麻疹初期，猩紅熱の初期，衄血，眼充血，扁桃腺炎，皮膚病の一種，頭痛烈しき感冒などに応用される。

注5 熱病で頭痛発熱，悪寒体痛，鼻乾不眠のもの，あるいは目痛み鼻乾き眠らず，自汗悪熱するもの，あるいは麻疹水痘等で発熱が出るか出ないか疑わしいもの，あるいは出にくいものを目標とする。

感冒，流感，麻疹，丹毒，猩紅熱，水痘，鼻血，眼充血，扁桃腺炎，皮膚病などに応用される。加減法：(1)頭痛に葱白若干を加える。(2)咳には桑白皮 3.0 を加える。(3)胸部の熱には黄芩3.0薄荷葉2.0を加える。(4)汗なきものは麻黄 3.0 を加える。(5)咽痛には桔梗3.0を加える。(6)発黄丹毒には玄参2.0を加える。

処方番号：107　　**処方名**：椒梅湯（しょうばいとう）

処方構成：
烏梅 2、山椒 2、濱椰子 2、枳実 2、木香 2、縮砂 2、香附子 2、桂枝 2、川楝子 2、厚朴 2、甘草 2、乾姜 2

用法・用量：
湯

しばり：
体力に関わらず用いる。

効能・効果：
回虫の駆除

原典：万病回春
出典：勿誤薬室方函口訣

解説：
回虫、蟯虫症に用いられる。出典の浅田宗伯『勿誤薬室方函口訣』に一般の駆虫薬や殺虫薬で効果のない回虫症で腹痛を伴うものに用いるとあり、烏梅、山椒を主剤とし、梹榔子、川楝子の駆虫作用のある漢薬に、枳実、木香、縮砂、香附子、桂枝、厚朴、乾姜の気剤（芳香性健胃整腸剤）を加味した方剤であるから、平素蛋白質を多食して、げっぷ、口臭、胸やけがする香辛料の欠けた人に多くあらわれる回虫症に応用される。

107.椒梅湯

参考文献名	烏梅	山椒	檳榔子	枳実	木香	縮砂	桂枝	川楝子	厚朴	甘草	乾姜
勿誤方函口訣　注1											
診療の実際	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
診療医典	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2

注1　此方は蟯虫の腹痛を治す，殺虫の薬応せざる者に効あり。その一等軽き者を椒梅丸とす。

処方番号：108　　**処方名**：消風散（しょうふうさん）

処方構成：
当帰 3、知母 1.5、地黄 3、胡麻 1.5、石膏 3-5、蝉退 1、防風 2、苦参 1、蒼朮 2-3（白朮も可）、荊芥 1、木通 2-5、甘草 1-1.5、牛蒡子 2

用法・用量：
湯

しばり：
体力中等度あるいはそれ以上の人の皮膚疾患で、かゆみが強くて分泌物が多く、ときに局所の熱感があるものの次の諸症

効能・効果：
皮膚炎、慢性湿疹、じんま疹、水虫、あせも

原典：外科正宗
出典：

解説：
若くて元気な人の頑固な湿疹に多く用いられ、病変は顕著で活動的であり、痒みも劇しい亜急性、慢性の湿疹に用いるが相当に体力があって、貧血の状態のないものに用いる。方名は散であるが、煎剤として湯液で用いる。

『方函類聚』に「此方は風湿血脉に浸淫して瘡疥を発する者を治す。一婦人年三十計年々夏にあれば惣身悪瘡を発し、肌膚木皮の如く掻痒時稀水淋漓不可忍諸医手を束て癒へず余、此方を用る事一月にして効あり、三月にして全く癒」とある。

108.消風散

参考文献名		当帰	地黄	石膏	防風	蒼朮	木通	牛蒡子	知母	胡麻	蝉退	苦参	荊芥	甘草	朮
処方分量集		3	3	3	2	2	2	2	1	1	1	1	1	−	
診療の実際		3	3	3	2	2	2	2	1.5	1.5	1	1	1	1	
診療医典	注1	3	3	3	2	2	2	2	1.5	1.5	1	1	1	1	
症候別治療		3	3	5	2	−	5	2	1.5	1.5	1	1	1	1.5	3
処方解説	注2	3	3	3	2	2	2	2	1.5	1.5	1	1	1	1	
後世要方解説		3	3	3	2	2	2	2	1.5	1.5	1	1	1		
応用の実際	注3	3	3	5	2	−	5	2	1.5	1.5	1	1	1	1.5	3
明解処方		3	3	3	2	2	2	2	1.5	1.5	1	1	1	1	
漢方処方集		3	3	3	2	−	2	2	1.5	1.5	1	1	1		
診かた治しかた		3	3	5	2	−	2	2	2	−	1.5	1.5	2	1.5	2
基礎と診療		3	3	3	2	2	2	2	1.5	1.5	1	1	1		

注1 頑固な湿疹で，分泌物があって痂皮を形成しその外見が汚穢で，地肌に赤味を帯び，痒みが強く，口渇を訴えるものを目標とする。

注2 頑固な湿疹で，分泌物が多く，痂皮を形成し，地肌が赤味を帯び，痒みが強く，口渇を訴えるのを目標とする。

外科正宗(疥瘡門)に「風湿，血脈ニ浸淫シ，瘡疥ヲ生ズルコトヲ致シ，瘙痒絶エザルヲ治ス。及ビ大人，小児，風熱，癮疹身ニ遍ク，雲片斑点タチマチ有リ，タチマチ無キヲ並ビニ効アリ」とある。外科正宗には，「白屑風（しらくも），痤痱瘡(あせも)，鈕叩風(風湿による皮膚瘙痒症)のところに消風散を用う」としてある。

注3 亜急性慢性の湿疹に用いる。その目標は，皮膚に丘疹が密生して癒合し，一面に発赤，腫脹し，滲出液が多くて湿潤し，瘙痒が甚だしいもので，あるいは口渇があり，あるいは厚い痂皮を生じて一見きたならしくみえる。活動的な病変のものである。

処方番号：109　　**処方名**：逍遙散（八味逍遙散）（しょうようさん／はちみしょうようさん）

処方構成：
当帰3、芍薬3、柴胡3、白朮3（蒼朮も可）、茯苓3、甘草1.5-2、生姜1、薄荷葉1

用法・用量：
湯

しばり：
体力中等度以下から虚弱で肩がこり、疲れやすく精神不安などの精神神経症状、ときに便秘の傾向のあるものの次の諸症

効能・効果：
冷え症、虚弱体質、月経不順、月経困難、更年期障害、血の道症、不眠症、神経症

原典：太平恵民和剤局方
出典：

解説：
本方の名称は「すなわち、薬は能く病をして安からしめ、則ち逍遥　翔自適する也」というところから逍遙散と名付けられた。
少陽病の虚証体質に現れる、漢方でいう「肝」の失調状態。とくに婦人の虚労や神経症状に伴う諸疾患等に用いられる和剤である。小柴胡湯と補中益気湯との中間に位す。なお、逍遙散を八味逍遙散ともいう。
通常、牡丹皮、山梔子を加えて加味逍遙散（丹梔逍遙散）として使用されることのほうが多い。

109.逍遥散

参考文献名		当帰	芍薬	柴胡	朮	茯苓	甘草	乾姜	薄荷葉	生姜	薄荷
処方分量集		3	3	3	3	3	1.5	−	−	3	1
診療の実際	注1	3	3	3	3	3	1.5	−	−	2	1
診療医典	注2	3	3	3	3	3	1.5	−	−	2	1
症候別治療	注3	3	3	3	3	3	1.5	−	−	2	1
処方解説		−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
後世要方解説	注4	3	3	3	3	3	1.5	1.5	−	−	1
漢方百話		−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
応用の実際		−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
明解処方		−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
漢方医学		−	−	−	−	−	−	−	−	−	−

注1　炎症充血著しくなく慢性で虚証のもの，月経不順，腹痛，白帯下があり，冷え症の傾向あるものに用いる。貧血気味で脉腹ともに緊張するが充実してないもの。

注2　主として更年期障害，血の道症，月経不順，流産や人工中絶および卵管結紮後に起こる諸神経症状に用いられる。

また，不妊症，湿疹，疳癪持ち，便秘症などに応用される。

注3　妊娠中の舌の荒れ。

注4　肝部の鬱熱を清解。婦人の気鬱，血の道に多く用いられる。その他，月経不順，産前産後口舌靡爛，皮膚病，肩こり，更年期障害，便秘。

参考：和剤局方に「血虚労倦，五心煩熱，肢体疼痛，頭目昏重，心松頬赤，口燥咽乾，発熱盗汗，減食嗜臥及び血熱相搏ち，月経調はず，臍腹脹痛，寒熱瘧の如くなるを治す。又室女血弱陰虚して栄営和せず，痰嗽潮熱肌体羸瘦，漸く骨蒸と成るを治す」とある。

万病回春に「肝脾血虚，発熱或いは潮熱，或いは自汗盗汗，或いは頭痛目渋，或いは怔忡寧らず，頬赤口乾き，或いは月経不順，或いは肚腹作痛，或いは小腹重墜，水道渋痛，或いは腫痛膿出で，内熱渇を作すを治す。」とある。

医方集解に「血虚肝燥，骨蒸労熱，嗽咳，潮熱，往来寒熱，口乾き便渋り，月経調はざるを治す。骨蒸潮熱は肝血の虚なり。肝火肺に乗じ，故に咳嗽す。邪少陽にあり，故に往来寒熱す。火盛にして金を剋し，水を生ずること能はず。故に口渇し便秘す，肝は血を蔵す，肝止む，故に経水調はず」とある。

109.八味逍遥散

参考文献名		当帰	芍薬	柴胡	朮	茯苓	生姜
和剤局方　巻之九治婦人諸疾	注1	1両	1両*1	1両	1両*2	1両	—*3
万病回春　巻下虚労	注2	1銭	1銭*1	1銭	1銭*2	1銭	—*4
中国大辞典	注3	1銭	1銭5分*1	7分	1銭*2	1銭	3片*4
	注4	1両	1両*1	1両*5	1両*2	1両	—*4
診療医典		3	3	3	3	3	2*6
症候別治療	注5	3	3	3	3	3	2
医学処方解説	注6	4.5	4.5	4.5	4.5*2	4.5	2.1*7
実用療法		3	3	3	3	3	2
処方分量集		3	3	3	3*2	3	1*7
漢方医学		–	–	–	–	–	–

*1　白芍薬　*2　白朮　*3　焼生姜　*4　榎姜　*5　北柴胡　*6　乾生姜は1　*7乾姜

参考文献名	生薬名	甘草	薄荷葉	麦門冬	陳皮
和剤局方　巻之九治婦人諸疾	注1	半両	–		
万病回春　巻下虚労	注2	5分	–		
中国大辞典	注3	8分	5分		8分
	注4	1両5銭		–	
診療医典		1.5	1		
症候別治療	注5	1.5	1		
医学処方解説	注6	3	2.1		
実用療法		1.5	1		
処方分量集		1.5	1		
漢方医学		–	–	–	–

注1　逍遙散：治血虚労倦，五心煩熱，肢体疼痛，頭目昏重，心忪頬赤，口燥咽干，発熱盗汗，減食嗜臥，及血熱相搏，月水不調，臍腹脹痛，寒熱如瘧，又療室女血弱陰虚，栄衛不和，痰嗽潮熱，肌体羸瘦，漸成骨成。

右為粗末，毎服二銭，水一大盞，焼生姜一塊切破，薄荷少許，同煎至七分，去渣熱服，不拘時候。

注2　逍遙散：治肝脾血虚発熱，或潮熱，或自汗盗汗，或頭痛目眩，或怔忡不寧，頬赤口乾，或月経不調，或肚腹作痛，或小腹重墜，水道澁痛，或腫痛出膿，内熱作渇。

右剉一剤，煨姜一片，薄荷少許，水煎服，加牡丹皮梔子炒，名加味逍遙散。

注3　逍遙散之第一方，太平恵民和剤局方，治肝気抑鬱，血虚火旺，頭痛目眩，頬赤口苦，倦怠煩渇，寒熱欬嗽，両脇作痛，臍部脹痛，小腹重墜，婦人経水不調，脈弦大而虚(陳皮一作六分，薄荷葉一作七葉，一方無陳皮)。

注4　八味逍遙散即逍遙散之第三方，集成方，治婦人血虚労倦，五心煩熱，肢体疼痛，頭目昏重，心忪頬赤，口燥咽乾，発熱盗汗，減食嗜臥，及血熱相傅，月水不調，臍腹脹痛，寒熱如瘧，大便秘澁，室女血弱陰虚，栄衛不和，痰嗽潮熱，肢体羸瘦，漸成骨蒸。(甘草一作五銭。) 剉散，毎服三四銭，清水一盞，加煨姜三片，麦門冬二十粒(一作薄荷三分)。煎至六分，去滓，不拘時熱服。

注5 口舌の疼痛：妊娠中によく舌のあれることがある。このような患者に，この方を用いて著効を得ることがある。目黒道琢は餐英館療治雑話には，次のようにのべている。「この方は諸病で虚熱があって，脈が数で，気が鬱してのびず，怒りやすく，心下は痞え，両方の脇下が拘攣し，左脇がとくにひどく，或いは左に動悸のあるものを標的とする。さて口舌咽喉等に瘡を生じて痛む者には実熱の者が多く，虚証は少ないのである。この方は虚火によって，口舌に瘡を生ずるものによく応ずる。舌上あるいは舌のさき，舌の横にぐつぐつと瘡を生じ，あるいは正中が少しの間，鳥の皮をむいたようになる証には必ず効がある。これは腎肝の虚火が発動して瘡ができた証であるから，脈，腹ともに実することはない。…」

注6 此方ハ小柴胡湯ノ変方ニシテ，小柴胡湯ヨリハ少シ虚状ヲ帯ビ，柴胡姜桂湯，補中益気湯ヨリハ力アルモノナリ。第一婦人虚労ヲ治ス剤ナレドモ肺尖加答児の初期ニ用ヒテヨキコトアリ。大体ガ中和剤ニシテ病後調理ニ用ヒテヨシ。加味逍遙散ハ清熱ヲ主トシテ上部ノ血症ニ効アリ，頭痛面熱鼻衄肩背強バル等ニ用ユ。婦人一切ノ申分タヘザルニ用ヒテ肝気ノ亢ブルヲ和ス。

処方番号：109A　　**処方名**：加味逍遙散（かみしょうようさん）

処方構成：
当帰 3、芍薬 3、白朮 3（蒼朮も可）、茯苓 3、柴胡 3、牡丹皮 2、山梔子 2、甘草 1.5-2、生姜 1、薄荷葉 1

用法・用量：
湯

しぱり：
体力中等度以下から虚弱でのぼせ感があり、肩がこり、疲れやすく、精神不安やいらだちなどの精神神経症状、ときに便秘の傾向のあるものの次の諸症

効能・効果：
冷え症、虚弱体質、月経不順、月経困難、更年期障害、血の道症、不眠症

原典：万病回春
出典：

解説：
逍遙散に牡丹皮、山梔子を加えた処方である。別名丹梔逍遙散という。小柴胡湯証より体力が低下したものに用いる。逍遙散証で、肩こり、上衝、頭痛等が著明で、やや熱状の加わったものに用いる。血の道症に広く使用されている。

109A.加味逍遙散

参考文献名		当帰	芍薬	朮	白朮	茯苓	陳皮	柴胡	牡丹皮	牡丹
処方分量集		3	3	−	3	3		3	2	−
診療の実際		3	3	3	−	3		3	2	−
診療医典	注1	3	3	−	3	3		3	2	−
症候別治療		3	3	3	−	3		3	2	−
処方解説	注2	3	3	−	3	3		3	−	2
後世要方解説		3	3	−	3	3		3	2	−
漢方百話		3	3	−	3	3		3	−	2
応用の実際		3	3	3	−	3		3	2	−
明解処方		3	3	−	3	3		3	2	−
漢方処方集		−	−	−	−	−		−	−	−
漢方入門講座		−	−	−	−	−		−	−	−
漢方医学	注3	3	3	−	3	3		3	2	−
精撰百八方	注4	3	3	3	−	3		3	2	−
古方要方解説		−	−	−	−	−		−	−	−
成人病の漢方療法		3	3	3	−	3		3	2	−

参考文献名		山梔子	山梔	梔子	甘草	乾生姜	生姜	乾姜	薄荷葉	薄荷
処方分量集		−	−	2	2	1	−	−	−	1
診療の実際		−	−	2	1.5	−	2	−	−	1
診療医典	注1	−	−	2	2	1	−	−	−	1
症候別治療		−	−	2	1.5	−	2	−	−	1
処方解説	注2	−	2	−	1.5	1	−	−	1	−
後世要方解説		2	−	−	1.5	−	−	1.5	−	1
漢方百話		−	2	−	1.5	1	−	−	1	−
応用の実際		−	−	2	2	1	−	−	−	1
明解処方		2	−	−	1.5	−	−	1.5	−	1
漢方処方集		−	−	−	−	−	−	−	−	−
漢方入門講座		−	−	−	−	−	−	−	−	−
漢方医学	注3	−	−	2	2	−	2	−	−	1
精撰百八方	注4	−	−	2	2	−	1	−	−	1
古方要方解説		−	−	−	−	−	−	−	−	−
成人病の漢方療法		−	−	2	2	−	1	−	−	1

注1　虚証体質に現われる肝障害症状，とくに婦人の神経症状を伴う諸疾患に用いられる。……主訴は四肢倦怠感，頭重，眩暈，不眠，多怒，逍遙性（不定期）灼熱感，月経異常，午後の逆上感と顔面紅潮，また背部に悪寒や蒸熱感や発汗を起こすこともある。

注2　少陽病の虚証で，病は肝にあるといわれている。すなわち小柴胡湯の虚証で，胸脇苦満の症状は軽く，しかも疲労しやすく，種々の神経症状をともなうものを目標とする。主訴は四肢倦怠，頭重，眩暈，不眠，多怒，逍遙性熱感（ときどき定めなき灼熱感がくる），月経異常，午後の逆上感と顔面紅潮が起こり，また背部に悪寒や蒸熱感，発汗等を起こすというものなどを参考とする。

注3　血の道症と呼ばれる婦人の神経症で，疲れやすく，気分がむらで落ちつかず，物事が気にかかり，頭重，頭痛，肩こり，めまい，不眠，のぼせ，足冷，月経異常，腰痛，便秘などがあって，いつも申し分の絶えないもの。

注4　百々漢陰の梧竹楼方函口訣に，「この処方は婦人一切の申し分に用いてよく効く」と書いてある。要するに，婦人がしじゅう，あっちが痛い，こっちが悪いと，つぎつぎ苦痛を訴えるものをいっている。しかも現代医学的には，殆んど病変がみとめられないものは，本方の適応症である。

処方番号：109B　　**処方名**：加味逍遙散加川芎地黄（加味逍遙散合四物湯）
（かみしょうようさんかせんきゅうじおう／かみしょうようさんごうしもつとう）

処方構成：
当帰 3、芍薬 3、白朮 3（蒼朮も可）、茯苓 3、柴胡 3、川芎 3、地黄 3、甘草 1.5-2、牡丹皮 2、山梔子 2、生姜 1、薄荷葉 1

用法・用量：
湯

しばり：
体力中等度以下から虚弱で皮膚があれてかさかさし、ときに色つやが悪く、胃腸障害はなく、肩がこり、疲れやすく精神不安やいらだちなどの精神神経症状、ときにかゆみ、便秘の傾向のあるものの次の諸症

効能・効果：
湿疹、しみ、冷え症、虚弱体質、月経不順、月経困難、更年期障害、血の道症

原典：本朝経験方
出典：

解説：
加味逍遙散と四物湯を合方した処方である。加味逍遙散に川芎と地黄を加えた処方で、主に婦人の頑固な皮膚病に用いられる。胃腸虚弱で下痢しやすいもの、本方を服用して食欲減退するものには用いてはならない。

109B.加味逍遙散加川芎地黄

参考文献名		当帰	芍薬	朮	白朮	茯苓	柴胡	川芎	地黄	熟地黄	甘草	牡丹皮
漢方製剤　加味逍遥散		3	3	3	−	3	3	−	−	−	1.5〜2	2
漢方製剤　四物湯		3〜4	3〜4	−	−	−	−	3〜4	3〜4	−	−	−
処方分量集		3	3	−	3	3	3	3	−	3	2	2
診療の実際	注1	3	3	3	−	3	3	−	−	−	1.5	2
		3	3	−	−	−	−	3	−	3	−	−
診療医典	注2	3	3	−	3	3	3	−	−	−	2	2
		3	3	−	−	−	−	3	3	−	−	−
症候別治療		3	3	3	−	3	3	3	3	−	1.5	2
処方解説	注3	3	3	−	3	3	3	3	3	−	1.5	−
後世要方解説	注4	3	3	−	3	3	3	−	−	−	1.5	2
		4	4	−	−	−	−	4	−	4	−	−
漢方百話		−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
応用の実際	注5	3	3	3	−	3	3	−	−	−	2	2
		4	4	−	−	−	−	4	4	−	−	−
明解処方		−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
漢方処方集		−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
漢方入門講座		−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
漢方医学	注6	3	3	−	3	3	3	0	0	−	2	2
精撰百八方		−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
古方要方解説		−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
成人病の漢方療法	注7	3	3	3	−	3	3	0	0	−	2	2

参考文献名		丹皮	山梔	山梔子	梔子	乾生姜	生姜	乾姜	薄荷葉	薄荷	用法・用量
漢方製剤　加味逍遥散		−	−	2	−	1	−	−	1	−	*1
漢方製剤　四物湯		−	−	−	−	−	−	−	−	−	*2
処方分量集		−	−	−	2	1	−	−	−	1	
診療の実際	注1	−	−	−	2	−	2	−	−	1	*3
		−	−	−	−	−	−	−	−	−	
診療医典	注2	−	−	−	2	1	−	−	−	1	*4
		−	−	−	−	−	2	−	−	−	
症候別治療		−	−	−	2	−	−	−	−	1	*5
処方解説	注3	2	2	−	−	1	−	−	1	−	*6
後世要方解説	注4	−	−	2	−	−	−	1.5	−	1	*7
		−	−	−	−	−	−	−	−	−	
漢方百話		−	−	−	−	−	−	−	−	−	
応用の実際	注5	−	−	−	2	2	−	−	−	1	*8
		−	−	−	−	−	−	−	−	−	
明解処方		−	−	−	−	−	−	−	−	−	
漢方処方集		−	−	−	−	−	−	−	−	−	
漢方入門講座		−	−	−	−	−	−	−	−	−	
漢方医学	注6	−	−	−	2	−	2	−	−	1	*9
精撰百八方		−	−	−	−	−	−	−	−	−	
古方要方解説		−	−	−	−	−	−	−	−	−	
成人病の漢方療法	注7	−	−	−	2	−	1	−	−	1	*10